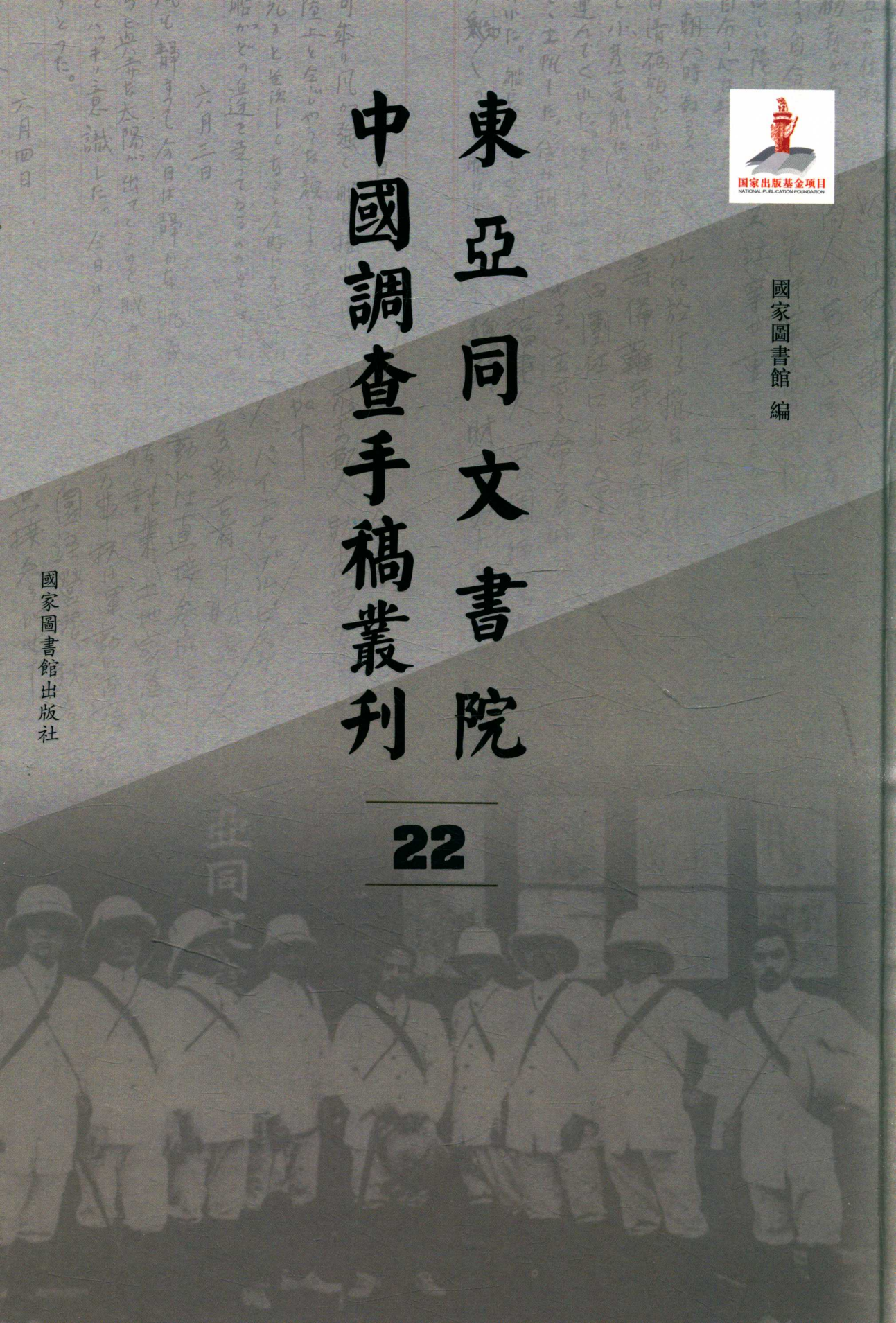
東亞同文書院中國調查手稿叢刊

22

國家圖書館 編

國家圖書館出版社



國家出版基金項目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

東亞同文書院中國調查手稿叢刊

22

國家圖書館 編

國家圖書館出版社

第二二册目録

昭和四年(一九二九)旅行日誌(第二十六期生)

法林一磨　第四十八巻……一
萩原藏六　第四十九巻……一二五
高松義雄　第五十巻……一四九
林茂治　第五十一巻……二二五
榎原德之郎　第五十二巻……二八三
西村剛夫　第五十三巻……三四五
前島岩男　第五十四巻……四三三
伊東敏雄　第五十五巻……四七一
橋本伊津美　第五十六巻……五五三

昭和四年度

調査日誌

滇越沿線班

法林一麿

東亞同文書院圖書館藏書用紙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四十八巻　調査旅行日誌

日誌本文の前に

日誌を書くに當り、どの程度まで觸れ、どの範圍に止めるかの問題は、数日私を考へさせた。短時日の旅行であり、団体旅行である以上、私達の手にし得た材料は、見聞は五十歩、百歩で、個人的に特に突っ込んだ觀察や、記録は有り得ないし、又なし難い。故に今自分が獲得した概括的智識――経済、政治、外交、貿易、沿革、交通、地理等――を日誌中に羅列することは、一ッには他の班員の調査科目を侵し、重複せる記録をなすこと、なり、二ッには量に於て余りに尨大にして然も事實上内容なき記録となる。この觀点より自分は出來得る限り他の班員の調査科目と支

東洋文化研究所調査報告用紙

障なき程度に於て、或は自己のみが得たる記録にして、而も自分の調査科目外に置かるべきものについてのみ記録したい。又旅行中の日常茶飯も亦簡略したい。それは温き追憶となる本人にとりては興味深い、又尊い経験であらうとも、第三者には大なる裨益を齎すものでないから。

東亞同文書院圖書館印

滇越沿線調査日誌

五月廿九日　上海出發より
七月　五日　在香港解散まで

× × × × × ×

初夏の訪れか、新緑の樹にも梢にも、血潮色さす乙女の頰にも、あり〳〵と今は讀まれるばかりになつた。地を抽く筍、天空に舞ひ上る雲雀、さてはまた灼春を火と燃ゆる花。

誰ぞや憂愁の胸を抱いて、見はてぬ夢のあとを恋ひつゝ、徒に佐保姫の裳に涙を墜すものは來って爽

東亞同文書院圖書館

かなる風の薫りを、スピリットとマインドと、そしてボディに受けて、萬物生育の恵みに大手を、擴げんとするものはない乎。

強健なる肉體に凌霄の氣を養ひ、生新の頭腦に良智の萠芽を培へ。ピタゴラスの井戸よ、コロンバスの卵よ。われ等はそれを語るべく、餘りに進み過ぎてゐる。

豊かなる思想と、清かなる情操と、旱れす渇かぬ永遠の青年よ、

躍進の調べ合せよ。灼熱歌をうたへ。

新しき時代は海の外へ!!

「沿の外へ!」そは日本再生の叫びである。

五月廿九日

今日は慈母が愛兒を苦難の旅に送るの日である。待った、待った、三年と二ヶ月、書院生活は汝のための準備的行為に過ぎなかったのだ。

旅立ちに際し、今こそ心は感激と緊張にウチ震ふ。

旅へ！　旅へ！　忍従の旅へ！

若者の心臓は鼓動し、血は沸る。

聞きふり、歌ひふりた『嵐吹けく　マカワオロシ』の歌は、今日は又、別の新しい生命と感激とを以て私に迫る。

「同學諸兄よ！　さらば」の声を後に　バンドへと急いだのは八時だった。

ランチは　私を蒿山丸に運んだ。　十時、蒿山丸は浦東の岸壁を離れ　長河の濁流を下る。　イヨ〳〵旅へ

東亞同文書院調査報告用紙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のスタートは切られた。

船長の好意で「三等から一等へ」の飛躍は、どんなにこれから一週間の海上生活に、安樂と自由とを與へたことか！

夜、船はもう寧波沖を走つてゐるのであらう。

五月廿日

船は南へ〳〵と直線的に進んで行く。午前十時船長を訪問する。ムツチリした好々爺である。私達の為に色々珍らしい南支航海の話をして下さつた。和蘭に代る海賊について話を承る。

海賊の根據地、ヴァイアス、ヴェイの話、海賊横行の貿易、交通に與へる打撃等の話。目並ではあるが一事實であるから仕方かな〳〵）海賊を撲滅し得ざる原因について氏は

次の二点を擧げてゐられる。

一、支那政府の無力。

二、實力ある外國が之をなす時は主權侵害として官賊一致して外國に當ること。

尚氏は第二の原因についての英國の嘗めた經驗を述べられた。

然し海賊そのものも、好んであんな危っかしい商賣をしてゐるわけでなく、海賊でもしなければ生きて行けないといふことを考へると、支那人も可哀想になる。その反対に自分が日本人であるといふ幸福感がシミ〴〵迫ってくる。

現在盛んに叫ばれる、「外國船舶の支那沿岸貿易權の回收」は同情に値するものはあるが、之が史的觀察を下す時、そが支那政府の無力に起因する海賊の横行、跳梁

に端を発するを知る時、支那自身に責のあることは否定出来ない。治外法権にしろ、関税自立権にしろ、それを獲得するに至る歴史を再吟味することが大切ではないか。然し私は支那に対し酷であり、世界の大潮流に乗れる被圧迫民族の自由、解放、獨立の運動に同情と理解とを有しないものではない。又狭隘な国家観念を固執する者でもない。単し人道主義的センチメンタリズムに理智を浸却するの愚は採らないところである。「同情の安売り」は支那を真に愛する所以でなく、支那の健全なる発達を損ふものであることを思ふ。

退屈のまゝに、一同蓄音機を酷使して僅に無聊を慰める。

五月廿一日

『陸の王者、海上の弱者』

次第に落伍者の出来るのを、憂然的プライドを感じながら見てゐる。そして一人、未だ見ぬ華南、越南、雲南へ逞しき想像を恣にする

もう福州の沖にかゝつてゐるだらふ。

六月一日

厦門に夜中に着く　厦門が我が台湾の対岸にして台湾貿易の要所を占め台湾銀行の支店のあるのは人の知るところである。

夜が明けた、右手には支那で一番汚い都會といはれる厦門が廃址の様に　左手には鼓浪島―外人居留地―山の手

東京国文書院調査報告用紙

には近代文明を示す洋館建が美しく誇らしく聳えてゐる。
上陸。直ちに領事館に行つたが引き越で忙しく落付く
暇もない
台湾銀行の先輩小園慶藏氏に市中を案内して貰
く、日光巖といふ巨大な石―山の頂上にある―に立てば廈
門、鼓浪島は一望の裡にある。
山を廈門と反対側に下ると立派な海岸がある海岸
の感は全く青島に似てゐる。
日本人倶樂部の近所で四川班と一緒に御馳走に
なり先輩の有難さを感じる。
三時出帆の船に一分の餘裕し置かず船板にて帰る

六月二日、

汕頭に夜明けに着く、八時頃檢閲の為に起される。
昨夜三時頃まで起きてゐたお蔭で眠いことこの上なし。
重松君が「船板代十円位ボラれることがある 先づ二
三円は覺悟してゐねばならぬ」といったので一同青くなる。 幸ひ
会社の船板が出るので四人で上陸した メーンストリートをのぞ
き賭博場を見る。
領事館に黄包車を飛ばす。
既に四川班が来てゐた。
先輩 戸根木氏宅に集る。
時局の関係で領事館は忙しいらしい。 日曜でも全部
働いてゐる。
食事迄に戸根木氏の案内で市中を歩き、中山公園を
訪ふ、公園は造られて間もなく 設備も十分に整ってゐない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com